意見広告

先月から子ども達の熱中症を予防するため、「運動時や屋外」に限定してマスクを外す学校が増えつつあるが、「屋内」ではマスクの着用が原則である。子ども達のマスクや黙食、ワクチンなどの感染予防対策は、今後も必要なのだろうか？当初は「未知のウイルス」と恐れられた新型コロナも、この2年間に世界中で研究が進み「既知のウイルス」になりつつあり、様々なデータも出揃ってきた。その研究結果や厚生労働省のホームページなどに掲載されている最新データを基にした分析と見解を、専門家（井上正康 大阪市立大学名誉教授）に聞いた。

厚労省ホームページなどから考えよう

子どもの屋内マスクとワクチン、今後も必要？

新型コロナ感染死の平均年齢は「82・2歳」

子どものマスクやワクチンを始め、これまでに行ってきた様々な感染予防は、今後も必要なのだろうか？

当初から一貫した見解を示し続けてきた井上正康教授は、次のように語る。「欧米諸国では被害が大きかった新型コロナも、図①のように日本では小さな被害で済んでいます。被害の度合いに大きな差が生まれたのは、日本人が病原性の低い初期の新型コロナ株に早期に感染していた事や、**免疫の特性が民族によって異なることに起因している。**この基本的な免疫学的事実を、今後の感染予防に活かすべきです。」

また国内では健康な子どもや若者が新型コロナに感染してもほとんど重症化していないし死亡していない。**一方、新型コロナで亡くなった人の平均年齢は82・2歳（東京都発表）で、これは男性の平均寿命を上回る。（図②）**

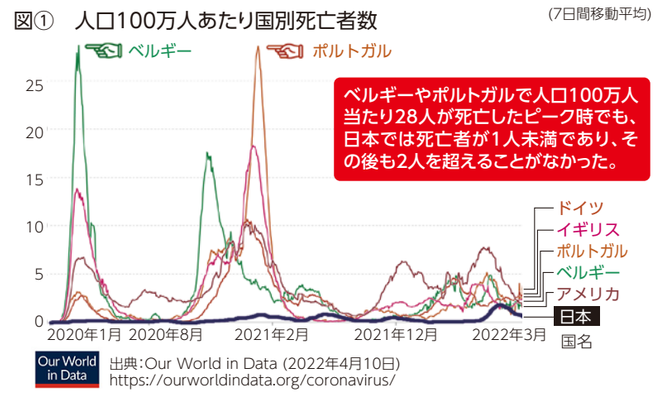
一見すると、70代以上の死亡者が多そうに見えるが、日本では**毎年140万人前後（1日平均3800人）**が亡くなっていて、新型コロナの感染死3万人（累計）は、その2%に過ぎない。（図③）

仮に、今後出現する変異株の毒性が強く、体の丈夫な若年層でも重症化する場合は、高齢者も含めて多くの被害が出る可能性がある。そのような時には、社会・経済活動を自粛して**「国民全体で警戒する必要」**があるのかもしれない。しかし、**「その可能性は限りなく低い」**と井上正康教授は分析する。

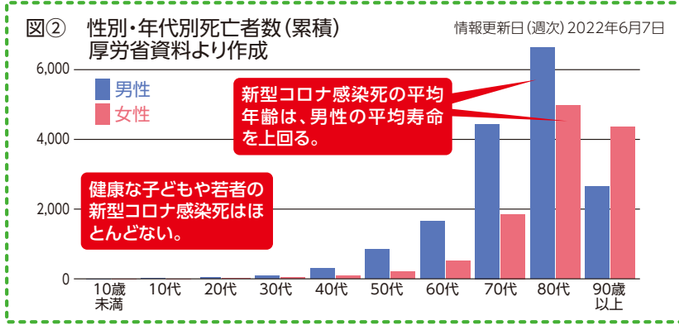
「ウイルスは変異を繰り返すたびに感染力が強くなるが、私たちの免疫力も強化されるため**毒性は相対的に弱まっていき、重症化しにくくなります。**そのため既往歴や基礎疾患のある高齢者を中心に警戒すれば十分であり、これまでのように社会全体で過剰に警戒する必要性はありません。」

感染力が強いウイルスが必ずしも恐ろしいウイルスではないのだ。子どものマスクやワクチンの必要性の有無も含め、今後、新型コロナにどれだけの注意を払うべきなのか、考え直す時期に差し掛かっていると言えるだろう。

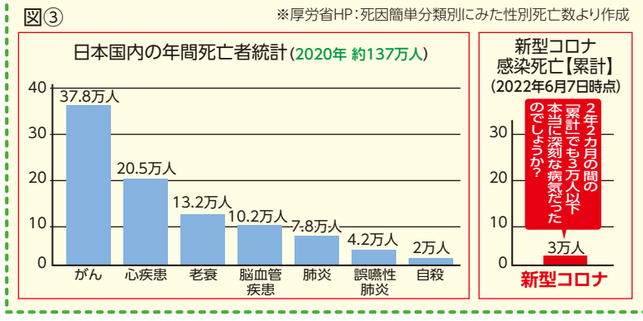
図①　人口100万人あたり国別死亡者数　（7日間移動平均）



図②　性別・年代別死亡者数（累積）厚労省資料より作成　情報更新日（週次）2022年6月7日



図③　※厚労省HP：死因簡単分類別にみた性別死亡数より作成



マスクをしていても感染してしまう理由

コロナ禍以降、私たちはマスクやアクリル板などによりウイルスを徹底的に避けるようになったが、井上正康教授は次のように指摘する。

「そもそもウイルスは、**空気、水、食物、家の中や生活空間の至る所**に存在しています。その大半は人体に無害であり、**私たちの体内**にも無数のウイルスが共生しています。

マスクを着用すれば、自分の咳やクシャミに伴って唾液や飛沫が周囲に拡散するのをある程度防げます。しかし、**ウイルスは極微サイズ（1ミリの1万分の1～10万分の1）**のため、**マスクと顔との隙間**などを簡単にすり抜けてしまいます。病院や介護施設ではマスクの着用率がほぼ100%ですが、クラスターが頻繁に発生しています。どんなにマスクや消毒等で感染予防しても感染する時はしてしまいます。人はウイルスと共に生きていくしかないのです。」

そもそもが**ウイルスに感染する宿命を受け入れてこその社会（WITHウイルス）**であるにもかかわらず、無菌状態や**「ゼロウイルス」**を目指し続け、人との触れ合いや人間らしい生活を犠牲にしているのが、日本の現状と言えるかもしれない。

子どもの感染予防はほどほどに

感染予防の中でも、手洗い、うがい、消毒はすればするほど、手や喉に付着しているウイルスや細菌を減らすことができる。しかし人の免疫はウイルスや細菌などと触れ合うことで鍛えることができるため、やり過ぎると免疫が弱くなってしまう。

これに関して、井上正康教授は「子どもはじゃれあって遊び、ワイワイ喋りながら給食を食べ、様々な細菌やウイルスと触れ合いながら免疫力を鍛えていきます。この時期は適度な感染によって強い身体を作る大切な時期です。ところが今、子どもたちは**消毒や黙食などの過剰な予防対策**によって免疫力を鍛える機会を失っています。**これでは子どもたちの免疫力が十分に鍛えられず、普通の風邪を引いただけでも重症化する可能性が高くなってしまいます。**」と警鐘を鳴らし続けている。

給食中の「黙食」いつまで？

日本人にとっての新型コロナの毒性は、上の図①～③で示した通りだった。しかし現在、**新型コロナは指定感染症2類（結核・SARSと同等）以上**に扱われている。そのためPCR検査でひとたび「陽性」と判定されると、子どもの学校が「休校」になったり、同僚が「濃厚接触者」として扱われたりして、周囲に迷惑を掛けてしまう。日本では新型コロナそのものよりも、自分自身が**「世間の迷惑者」**になってしまうことを恐れている人が多い。

この分類が2類から**5類相当（季節性インフルエンザと同等）**へ格下げされれば、この問題は解消され、子どもたちに**「過剰な感染予防」**を強要する必要もなくなる。また、近所の病院で普通に診察を受けることができるようになり、医療崩壊も防ぐことができる。

3年前を思い出してほしい。当時、私たちは**「感染」**という言葉を使うことがなかった。細菌やウイルスに感染しても特に症状がないなら、**健康な状態（無症候性感染）**であり、たとえ症状が出ても重症化しないなら、別段騒ぎ立てることもなかった。仮に祖父母が孫から風邪をうつされて亡くなったとしても、それは「寿命」として受け入れていたはずであり、風邪をうつしたことを責め立てるような大人もいなかった。

祖父母を重症化させないために、孫にマスクを付けさせ、すでに多くの健康被害が出ているワクチンを打つように勧め、給食中は一切喋らせず、歌も歌わせず、友達と「密」になって遊ばせない。2年以上にもわたり子どもたちには**「健全」**とは言い難い生活を送らせてきてしまったが、このような対策は本当に必要だったのだろうか。

世界各国はコロナ前の日常を取り戻しつつある。しかし、私たちがコロナ前の「日常」を取り戻し、未来ある子どもたちを健やかに育てるためには、まず私たち大人が**「常識」**を取り戻す必要があるのではないだろうか。

教えて！井上先生

Q　マスクで気を付けることは何かありますか？

A　子どもが日頃から他人の表情を見て育つことは、**脳と心の発達**に欠かせません。また、マスクで口元を隠し合うと、**「笑顔」**でのコミュニケーションができません。人格を形作る大切な時期にマスクによって表情を隠し合っていては、喜怒哀楽の感情を学び、**感受性を豊かにする訓練**が十分にできず、相手の感情を理解する力が十分に育まれない可能性があります。

子ども達は、一日の大半を過ごす学校や保育園で、先生や友達の表情を見ることのできない生活を2年以上も続けてきてしまいました。このことが今後どのような影響を及ぼすのかは一切分かりません。心の成長に取り返しのつかない影響が及んでいる可能性も想定し、**子ども達のマスクを一刻も早く外してあげることが大切だと考えます。**

プロフィール

井上 正康
大阪市立大学名誉教授
（分子病態学・医学博士）

感染症学、病理解剖学、分子病態学など幅広い医学知識から、俯瞰的に「新型コロナとワクチン」を分析。当初から一貫した見解を示し続け、『本当は怖くない新型コロナウイルス』など著作も多数。『ためしてガッテン』『世界で一番受けたい授業』『あるある大辞典』『ちちんぷいぷい』などテレビ出演も多い。4月5日に、衆参の国会議員を対象に「新型コロナとワクチン」に関する勉強会を国会内で開催している。

※上記内容のエビデンスはホームページ内に全て掲載しています。

ご支援ありがとうございました
累計寄付金額
293,299,490円
（2021年11月30日～2022年6月17日）
累計60紙（発行部数2,712万部）に掲載

マスクについては、すでに東京都多摩市立の全小中学校で、「マスク着用をしない子ども」への配慮がなされるようになり、全国初の『マスク自由化』が実現しています。

この内容に関するご意見やご感想は、右記二次元コードよりお寄せください。

必見！5,000名超の賛同コメントは下記よりご覧ください。

ホームページには、『紙面の内容を分かりやすく解説した動画』や、『おすすめ最新書籍』も掲載。また紙面のダウロードも無料でご利用頂けますので、ぜひご活用ください。

▼本広告に書ききれなかった最新情報も多数掲載！▼

https://jcovid.net/
ゆうネット　意見広告　検索
二次元コードで簡単検索

株式会社ゆうネット　新型コロナウイルス関連情報発信センター　代表取締役 堤　猛　福岡県福岡市中央区天神4-1-17　2F　TEL 092-235-2470　（ご意見・ご感想はHPよりお願いします。）